別表１

第１巻　地形と環境

刻々と変化する地形と環境の復元は、市川の歴史を考える上での前提条件であり、欠くことができない。第１巻では、前回の市史以降の最新の情報を盛り込んだ上で、13 万年前以降の市川の地形と環境を明らかにし、市川の歴史の「舞台」を時代別に復元する。また、前回の市史で昭和以降のみを対象とした災害の歴史を本巻に編入し、文献・映像等に記録された災害を網羅的に記述する。

第１章　地形と地質
- 第１節　地形
- 第２節　地質・地層
- 第３節　河川・湖沼・海岸

第２章　化石が語る古環境
- 第１節　貝化石・動物化石
- 第２節　花粉・植物化石
- 第３節　珪藻化石
- 第４節　その他の化石類

第３章　古環境の変遷
- 第１節　気候変化と海面変化
- 第２節　台地の基盤が作られた時代
- 第３節　古東京湾の形成（最終間氷期）
- 第４節　氷期の市川
- 第５節　縄文海進と海況変化
- 第６節　歴史時代の陸と海

第４章　環境変遷と人間活動
- 第１節　旧石器時代
- 第２節　縄文時代
- 第３節　弥生時代
- 第４節　古墳時代～江戸時代
- 第５節　明治時代～昭和時代
- 第６節　現在

第５章　災害の歴史
- 第１節　古文書にみる自然災害
- 第２節　明治・大正時代の自然災害
- 第３節　昭和時代の自然災害
- 第４節　現在の自然災害
- 第５節　将来予測

第２巻　ムラとマチ

第２巻では市川市域で繰り広げられた人々の営みを、郷土市川のムラやマチという最も身近なもののなりたちにスポットを当て、旧石器時代から江戸時代に至る時間軸のなかで描くことを目的としている。

最古の市川人が住み始めた旧石器時代、貝塚の恵みを受けた縄文時代をへて、暮らしも弥生以後、政事の時代を迎える。古墳時代から古代、そして中世・近世へと展開するくらしの実像をさまざまな手法から明らかにする。

第１章　市川最古の住民たち
　　―旧石器時代―
　第１節　最古の住民たちとその遺跡
　第２節　赤土に眠る石の文化
　第３節　旧石器時代から縄文時代へ

第２章　縄文の海と貝塚
　　―縄文時代―
　第１節　縄文海進と貝塚の形成
　第２節　道具と施設が語る生活の様子
　第３節　縄文人の身体と精神世界
　第４節　消えゆく縄文のムラと貝塚

第３章　社会の変動とムラの展開
　　―弥生～平安時代―
　第１節　稲作のはじまりと環濠のムラ
　第２節　葛飾の覇者の出現とムラの変貌
　第３節　国府をめぐるマチとムラ

第４章　鎌倉～戦国時代の
　　村町のすがたといのり
　　―鎌倉～戦国時代―
　第１節　中世房総の荘園公領と環境
　第２節　鎌倉時代の市川
　第３節　南北朝～室町時代の市川
　第４節　戦国時代の房総と市川
　第５節　板碑にみる中世市川の信仰と郷村

第５章　地域を支えた村・町の仕組と営み
　　－江戸時代１－
　第１節　村の概況
　　～村明細帳の世界～
　第２節　村の生業と生活
　第３節　御用留からみた社会像
　第４節　村役人交替をめぐる様相
　　～曽谷村を中心に～
　第５節　寺社と地域
　第６節　用水の成立と展開
　　～内匠堀を中心に～

第６章　行きかう人々と地域社会
　　－江戸時代２－
　第１節　市川・小岩関所の様相
　　～江戸川の管理をめぐって～
　第２節　木下道と行徳船
　　～銚子から日本橋までの交通を
　　めぐって～
　第３節　各地に残る「行徳道」
　　～塩をめぐる交流～
　第４節　文人・文化の交流
　第５節　本多藩支配をめぐる人との交流

第３巻　まつりごとの展開

市川は、飛鳥時代に下総国府が成立することで、室町時代に至るまで、下総国の中心として日本の政治や宗教の大きな流れに直接にかかわる。第３巻では、なぜ市川市に国府・国分寺がおかれ、『万葉集』に詠われ、中山法華経寺が建てられたのか、という市民の素朴な疑問をテーマに、国府の成立以前の状況から、国府の消長とその影響が薄れるまでの流れを古墳時代～戦国時代に追う。また、江戸時代にはいり、市川の各村がどのように幕藩体制下に組み込まれ、中央集権の元で新たに成立していくのか、という問題を考察し、さらに幕末期においては、いかにしてそこから離脱して明治時代へとつながっていったのかという課題に取り組んでいきたい。

第１章　葛飾の覇者とヤマト王権
- 第１節　ヤマト王権と下総・葛飾
- 第２節　フサの豪族と古墳
- 第３節　葛飾の覇者とその盛衰

第２章　国府のまつりごと・国分寺のいのり
- 第１節　下総国の成立
- 第２節　国府と郡家
- 第３節　国分寺の建立
- 第４節　文字による支配
- 第５節　ヒトの動き・モノの動き

第３章　真間の手児奈と菅原孝標の女
- 第１節　『万葉集』と葛飾・真間・手児奈
- 第２巻　手児奈の風景
- 第３節　『更級日記』と太日川
- 第４節　手児奈と孝標の女
- 第５節　いまに息づく手児奈の姿

第４章　古代国府から中世府中へ
- 第１節　消える遺跡と遺物
- 第２節　国家の変容と反乱
- 第３節　房総の復興と武士の成立
- 第４節　源頼朝と府中
- 第５節　千葉氏と国府・真間の館
- 第６節　日蓮の往来と富木常忍
- 第７節　中山法華経寺の成立

第５章　新勢力の進出
～下総国外とのかかわり～
- 第１節　下総守護千葉氏と市川
- 第２節　鎌倉公方・古河公方と市川
- 第３節　小田原北条氏の進出
- 第４節　小金高城氏の支配
- 第５節　小田原北条氏の終焉と徳川家康の関東入部

第６章　江戸幕府成立と市川の支配体制
- 第１節　近世市川の成り立ち
～開かれる江戸とつながる市川
- 第２節　幕領と旗本支配
- 第３節　本多支配の成立と展開
- 第４節　広域支配の設定

第７章　幕末維新期の市川と地域再編
- 第１節　開発と支配　～行徳と下総台地の開発
- 第２節　黒船来航と海防問題
- 第３節　大屋日記の世界と市川の村々
- 第４節　幕末期における塩浜の開発

第５節　戊辰戦争と幕藩体制からの離脱

第４巻　変貌する市川市域

大まかに言って軍郷であり農村でもあった都市近郊の近代の市川（市域）が、高度経済成長以降の人口の急増、住宅都市として現代都市に変貌する様相と、現代都市が抱える問題点をシャープに描ききることを狙いとする。

この巻は前回市史の刊行以降（昭和 50 年代以降）を主として扱うが、テーマによって前史として明治～戦後初期も紐解く。市川市とはどういうところなのか、という意識をもって編集にあたる。

第１章　水と向き合って
～治水と利水
- 第 1 節　江戸川水運の盛衰
- 第 2 節　真間川水系の成立
- 第 3 節　江戸川水閘門と行徳の可動堰
- 第 4 節　中小河川の水質悪化と下水道
- 第 5 節　水害とその対策

第２章　国府台の変遷
～野砲兵連隊から文教地区へ
- 第 1 節　国府台地域の近代のはじまり
- 第 2 節　軍隊と国府台地域
- 第 3 節　行楽地としての国府台地域
- 第 4 節　軍用地から教育研究機関への転換

第 3 章　産業の盛衰と市川
- 第 1 節　市川の農業
- 第 2 節　臨海地域の盛衰
- 第 3 節　工業の発展と変遷
- 第 4 節　商業・商店街の進展

第 4 章　市川市域の交通
- 第 1 節　交通機関の近代化と公共交通網の発達
- 第 2 節　総武線の発展
- 第 3 節　京成電鉄と市川
- 第 4 節　自動車交通とバス路線の発達
- 第 5 節　市域の都市鉄道整備
- 第 6 節　将来の交通網

第 5 章　都市基盤の整備
- 第 1 節　大正期の耕地整理事業
- 第 2 節　首都圏整備法と市域の宅地化
- 第 3 節　行徳地域の土地区画整理
- 第 4 節　市域のインフラ整備

第 6 章　市川市民のすがた
- 第 1 節　市域の人々と日常生活の変遷
- 第 2 節　市域の人々と学校
- 第 3 節　『市川都民』
- 第 4 節　活発な市民活動
- 第 5 節　市民とスポーツ

第 7 章　文化都市・市川
- 第 1 節　作品に描かれる市川
- 第 2 節　スポーツとイベント
- 第 3 節　多彩な文化施設と文化事業
- 第 4 節　レジャーという名の文化

第５巻　民俗（仮称）

市川市は大柏村（昭和 24 年）、行徳町（昭和 30 年）、南行徳町（昭和 31 年）と合併し、埋め立てを含めて現在の市域を形成した。農業・漁業が盛んであった頃、軍都であった頃、田畑や蓮田の宅地化や河川改修工事が進んだ時代を経て、市川市は首都圏の一画として発展してきた。

そうした都市化による変遷が目まぐるしい一方で、いまなお、基盤として形成された農村部や漁村部、町場のさまざまな文化が継承されている様子を見ることが出来る。

例えば、生業分野では、江戸時代から脈々と続いてきた市川名産の梨をはじめとする青果物や観賞用植物の栽培が市川北部の農村部で盛んであるのに対し、南部の漁村部では海苔の養殖や漁業の生産が挙げられ、また町場では職人技術による製作品やそれを商う人々の姿が見られる。かつて盛んだった行徳の塩をはじめ、そのような産物は、江戸川をはじめとする水路や街道を通じて近郊の江戸や周辺の地域と繋がり、多くの交流が持たれた。

第 6 巻では、このような多彩な生活文化に注目し、市川の各地域に深く関わってきた人々の日々の暮らしを浮き彫りにする。

〔総説〕「ムラの成り立ちと変遷」
　　地域の形成と変遷について、伝承から市川の民俗全体を窺う。
〔第一部〕「農村の民俗・漁村の民俗」
　① ムラとイエの生活
　② 人の一生
　③ 年中行事
　④ 民間信仰
　⑤ 生産と生業
〔第二部〕「町場と都市の民俗」
　① 道と交流
　② 法華経寺と門前町
　③ 新しい町空間
　④ 町の中の民俗
　⑤ 個人史の世界
〔第三部〕「各論」
　① 子どもの遊び
　② 口承文芸
　③ 芸能
　④ 墓制

第６巻　自然とその変遷

古く人がくらすようになったころ、市川の自然の姿はどうであったか。自然の変遷が人の生活にどう影響を及ぼすかを、いろいろな資料から推測する。

近年、人の活動の増大によって、自然に対する働きかけがしだいに強くなり、これが自然の改変をもたらすようになった。自然との調和の上になりたって生活する時代から、自然を改変し利用する時代へと移り変わってきた。

特に２０世紀後半からはこの傾向が著しくなり、自然本来の機能を衰退させることで、人の生活への負の影響も現れるようになった。

市史としては、そのような変遷や２１世紀初めの現状を記録し、将来を展望する資料とする。

第１章　市川市の地形と気象
　１節　市川市の地形
　２節　市川市の水循環
　３節　市川市の気象
　４節　地震の影響

第２章　自然の姿・昔から現代へ
　１節　むかしの植生を推測する。
　２節　自然と調和して暮らした時代
　３節　都市化した時代
　４節　都市生態系の登場

第３章　都市のなかにくらす動植物
　１節　帰化植物のくらし
　２節　タヌキ・ハクビシン
　３節　都市鳥のくらし（カラス・ムクドリ）
　４節　人と共存するツバメ
　５節　ヒキガエル・ヤモリ
　６節　大繁殖する昆虫
　７節　ジョロウグモ
　８節　ヤスデ・ダンゴムシ
　９節　外来生物

第４章　残された自然
　１節　樹林のあらまし
　２節　街なかのクロマツ群
　３節　大町公園
　４節　真間川水系
　５節　江戸川にくらす生き物
　６節　海
　７節　行徳水鳥保護区

５章　市川市の動植物の種類
　１節　植物の種類（フロラの概要）
　２節　動物の種類（ファウナの概要）
　３節　指定文化財・巨樹・保存樹

６章　自然を守るための活動
　付録　市川市の動植物リスト